

ラオス人の Facebook使用方法と特徴

山田 紀彦

ラオスではこの5年間でスマートフォン（以下、スマホ）が急速に普及した。そして、子供から大人までさまざまなソーシャルネットワーキングサービス（SNS）を利用するようになり、今やLINE、WhatsApp、Facebook（以下、FB）などは、友達だけでなく仕事面の連絡手段としても欠かせないツールとなっている。また調査の際にもSNSを通じてレターの写真を送り、アポイントを取ることもある。特にラオスの地方機関にはファックスがなく、アポイントのレターを送ることすら難しい。スマホとSNSの普及により、地方との連絡手段は飛躍的に向上したといえる。SNSのなかでもっとも普及し、多くの人々が利用しているのがFBである。

インターネット関連会社の調査によると、2015年3月現在のラオスにおけるFBユーザーの推定人数は約70万人、対人口比10.9%となっている。日本はユーザー数約2400万人で対人口比は19%である⁽¹⁾。2016年にはラオスのユーザー数は100万人、対人口比で約15%に達したとみられている。筆者が現在所属しているラオスの政府機関でもほぼすべての人がFBを使用している。ラオスのFBの使用は、セルフィーやニュースサイトの掲載など、日本や他国とほとんどかわらない。その一方でラオス人ユーザーのタイムラインを覗くと、独特の使用方法がみえてくる。以下、いくつか特徴的な使用方法を記す。

第1の特徴は、どこでも構わずセルフィー（自撮り）をし、FBにポストすることである。自分の写真をタイムラインに掲載することは、どの国でも多くのユーザーが行っている。ラオスでもセルフィーはもっともポピュラーな使用方法といってよい。しかしラオスの人々はありとあらゆる場所で写真を撮る。たとえばトイレである。鏡に移る自分の姿を写真に撮るのだが、多くの方は明らかにトイレとわかる構図で写す。時に

は写真にトイレのドアや便器が写っていることもある。

またお葬式などでも平気で自撮りを行う。故人の写真を目の前に自撮りをするのである。筆者の周囲のラオス人にお葬式での自撮りは不適切ではないかと質問したところ、大半は許容できると答えていた。もちろん一部の人は良いと思っていない。筆者がこれまでみたなかでもっとも驚いたのは、親の死体を目の前に自撮りをし、「今、父が死にました」とのメッセージと共にFBに写真を掲載しているユーザーをみたときである。本人は親の死を友達に伝達する手段としてFBを利用したようだが、さすがにそのような行動はラオス人の間でも批判が多かった。

第2は、事故や暴行現場の写真を掲載することである。一部のラオス人は交通事故現場で死傷者の写真を撮影し、それをFBに掲載する。ラオスでは車やバイクの増加にともない交通事故が多発している。特にバイクに乗る人々はヘルメットを被らないことが多いため、少しの接触で大事故に至ってしまう。首都ヴィエンチャンの町中ではほぼ毎日交通事故現場を目撃するといっても過言ではない。事故が起きた場合、周囲の人々の一部はまずスマホを取り出し写真を撮る。そしてそれをFBにポストする。なかには死傷者の写真をそのまま掲載するため、目を覆いたくなるような写真がタイムラインに流れることがある。もちろん、すべてのラオス人がそのような写真の掲載を許容しているわけではないが、大抵はあまり気にしないようである。

交通事故現場の写真以外にも、喧嘩や暴行の様子を掲載する人たちもいる。特に若者は友達の喧嘩やいじめの写真を掲載する。交通事故現場と同様に、喧嘩が始まると周囲の人々はスマホで動画を撮影しすぐにFBやその他のSNSで拡散する。ある1人の女子高校生が他の女子学生から集団で殴る蹴るの暴行を受けた動

画がFBに掲載された際には社会問題となり、警察が暴行を加えた加害者を拘束する事件に発展した。日本でも同様の動画がSNSにアップされることはある。しかしラオス人ユーザーのタイムラインをみると、そのような動画が頻繁にポストされている。もっとも多いのは女子中学生や高校生の取っ組み合いの喧嘩である。

第3の特徴は、内部情報や資料をネットにあげてしまうことである。特に公的機関職員が内部資料を撮影し平気でFBに掲載することが多い。たとえば県が秘密裏に中国企業に土地コンセッションを供与したとする内部資料をFBに掲載し、職員が拘束されるケースがあった。内容によってはおとがめなしの場合もあるが、このように拘束されることもある。

内部情報の暴露はこれまで知られていなかった情報に国民がアクセスできることでもある。一方政府にとっては、これまでのように都合の悪い情報を隠すことができなくなりつつある。たとえば、これまで頑なに隠してきた汚職や不正などの情報を一般メディアで報道するようになった。その点においては、SNSやFBによる内部情報の暴露は、政府に情報公開を促すきっかけになったともいえる。しかし内部情報の暴露は公的機関職員のモラルが疑われる問題でもある。

第4の特徴は、電話番号などの個人情報を公開することである。FBは設定によって自分のタイムラインをみるユーザーを制限できる。おもに、誰でもみることができる「公開」と、友達承認した人しかみることができない「友達」という設定がユーザーの大半を占めると考えられる。ラオス人ユーザーの設定もそうである。そして多くのラオス人が個人的なダイレクトメッセージではなく、他の人がみられる設定で電話番号などの個人情報を交換している。閲覧が友達に限定されている「友達」設定であっても、実際に会ったことのない見ず知らずの人も多い。「公開」設定であれば不特定多数の人に自分の電話番号が知れ渡ってしまう。しかしラオス人は電話番号が「公開」になっても特に気にする様子はない。SNSで自身の番号を公開するようなポストは日本や欧米では考えられない。

第5は、金言・格言サイトや、自己啓発的な言葉が並ぶサイトを掲載することである。ラオス人ユーザーのタイムラインをみる限り、非常に多くの人がこのようなサイトを閲覧し、気に入った言葉を自身のタイムラインにポストしている。そしてそこにフォロワー

が「いいね！」ボタンを押すのである。ラオスの人々は実行可能性はともかく、普段から理想を語ることが多い。FBでもその特徴がみて取れる。ただし自己啓発的な言葉やそのようなサイトの掲載は、日本人ユーザーにもよくみられることである。

第6は多くの人々が不審サイトを注意せずに閲覧し、同サイトがフォロワーに拡散してしまうことである。このようなことはどの国でも起こるが、ラオス人ユーザーは不審サイトやアダルトサイトであっても注意せずに閲覧し、それが他のユーザーに流れてしまうことが多々ある。

以上から、ラオス人ユーザーの多くは自己規制をすることなくSNSを使用していると考えられる。そこには物事にあまり慎重にならないラオス人の特徴が表れているのかもしれない。もちろん何も考えずに不適切な動画や画像をSNSにポストするのは他国でもみられる現象である。しかしお葬式でのセルフイーや公的機関職員による内部情報の暴露は、SNSの使用に対するラオスの人々の考えが日本や他国とは多少異なっていることを示しているといえる。もちろん政府も内部情報の暴露や不適切な動画・画像の掲載を問題視しており、法規制を行うなど対応している。しかしユーザーにとっては規制などお構いなしであり、いまだに目を覆いたくなるような動画や画像、また問題になるような内部情報がタイムラインに流れているのである。

(やまだ のりひこ／アジア経済研究所 在ヴィエンチャン海外調査員)

《注》

(1) http://www.cereja.co.jp/press_release20150323.pdf、2016年12月19日閲覧。